

書くことと生き方の摸索

—— 中高年期の学習活動としての可能性 ——

中 川 恵里子*

Groping for life through writing

—— The possibility of learning in middle-old age ——

Eriko NAKAGAWA

In Japan, since the movement of Seikatsukiroku in 1950's, the meaning of writing of common people about their lives has been argued from not only learning, but also historical or cultural point of view. This paper, by presentating a lot of writings of middle-old aged persons about their lives and analyzing them, discusses the reason why they dare to write about their lives today. Based on that thinking, we try to elucidate the relationships between the writing and mans mental developement in life-stage, and to consider the meanings or the possibility of writing. As a result, we find writings develope not only the recognition or creativity, but also emotional advancement. The following subject is to find the way how to deal with or analyze self-expression.

目次

はじめに

- I 現代における中高年と書くこと
 - A 中高年の間で広がる多様な実践
 - B 中高年手記の数量的分析を通して
- II 中高年手記の内容的分析を通して
 - A 中年後期(55~65歳)と書くこと
 - B 高齢期(65歳以上)と書くこと
- III 中高年期における書くことの意義と限界
 - A 書くことの意義
 - B 書くことの限界性
 - C 話すことと書くこと

おわりに

はじめに

生涯発達という言葉が使われるようになった1970年以降、一生涯を見通しながら発達を捉えようという生涯発達研究の動きは、「中高年の発達をどう捉えるか」という中高年(とくに高齢者)研究を主流に展開してきた。¹⁾このような生涯発達研究の成果によって、中高年の知的能力の可能性やアイデンティティ形成などが次第に明らかにされつつある。そして、例えば、「中年の危機」や退職などのような人生の発達段階における危機的状況に対処するような教育の必要性が強調され、そのような教育実践も企業や学習機関において次第に広がっている。しかし、年齢的心理的特性を明確にし、それに応じた学習機会を与えようというこのような試みは、非常に効率的である反面、中高年の在り方を逆に規定していつてしまうという危険性も内包する。「老後の生き甲斐づくりのマニュアル」などが囁かれる最近の社会的風潮に、

* 大学院博士課程

抵抗感や苦々しさを憶える中高年も実際少なくない。²⁾

したがって、発達心理学などの成果を教育に応用する場合には、もう少し慎重な議論が必要であるのはいうまでもなく、一番大切だと思われるのは、発達の危機への対応のための学習の必要性というような受動的な捉え方に留まらず、積極的に生き方を創造していく、つまり、自分自身の生き方を自覚的に捉え、そこから自分の人生を摸索し決定していけるような主体性を育てる学習の在り方が摸索されるべきではなからうかということである。このような意味からいえば、発達論によって学習を規定していくのではなく、学習活動から発達を考えていくという逆方向のアプローチが、むしろ、求められてしかるべきではなからうか。

このような考えをもとに、自分の人生を自覚的に捉える行為として、書くという活動に注目しようというのがこの論文の試みである。成人が書くことの意味は、従来、学習だけでなく、文化や歴史という側面からも多面的に論じられてきた。ここでは、中高年の間で自分史や手記などの表現活動が盛んであることに注目し、「なぜ書くのか」という問いを追求しながら、発達を、書くという行為を通して捉えていく。同時に、書くことの意味を発達の視点から再考してみたい。

まず、成人の書く活動は従来どのように分析され、論じられてきたのだろうか。生活記録運動以降、多くの論者たちによってその意義については多面的に論じられてきているが、ここでは4人の論者の議論をみていきたい。

例えば、50年代当時、生活記録運動の指導的立場として実践に直接関与した鶴見和子は、戦前の生活綴り方運動の伝統を受け継いだ無着成恭主宰の子供の生活綴り方教室に影響され、大人の思想形成の方法としての生活綴り方に注目する。³⁾ 根強く残る封建性に悩みつつも、その悩みを口では言えない人々が、自分の問題を自分の言葉で表現できるようになること⁴⁾を第一の課題としながらも、鶴見の目指した事は、実感をそのまま表現することではなく、それを仲間と共有し、社会化していくなかで、庶民の側からの思想形成に至る道を摸索することであった。⁵⁾ そのような意味でも、鶴見の主張は、仲間話し合い、書きあうという共同学習の方法としての生活記録であったのである。生活記録運動の主体は、農村青年や女工さんといった若者であり⁶⁾、自分たちの力で新しい社会を拓いていこうというのが、当時、運動に若者を向かわせた原動力であった。つまり、その時代の社会の変化に一番敏感に対応したのが若者たちであり、彼らの個々の生き方の摸索が新しい社会への摸索に通じていた時代であったといえる。

1970年代に自分史を提唱し、近年の自分史ブームに大

きな影響を与えた色川大吉は、歴史という視点から庶民が書くことの価値を主張した。色川は日本人の思想における主体性の道を探っていたが、その方法を“完成された思想そのものを対象とするのではなく、思想が形成されてくる歴史過程を、社会の底辺に潜む民衆の意識から把握する⁷⁾”ことに見出すに至る。その方法として、庶民の綴る自分史に注目し、そのなかに、未来を拓く変革の契機を見出そうとした。色川は自分史を、“独白や口承を文字化することによって、人は自分を相対化し、自分以外の人生を生きる価値や世界を発見し、人たることの深遠な意味に到達する。同時にそれは、自分の経験を理論化し、精神的な共有財産に変えさせる⁸⁾”と解釈する。自分史によって自己の体験が人類の共有財産になるというこの解釈は、多くの中高年の支持を得、70年以降、自分史愛好者が増えるきっかけともなる。⁹⁾

このように、自分史は70年代～80年代という時代に中高年の間で自然発生的に広がっていった。これは、1950年代という時代的背景が若者を生活記録運動に駆り立てた歴史に対比されうるといえるのではないだろうか。

一方、70年代後半～80年代にかけて、北田耕也は文化という視点から生活記録運動を含め、自分史、民話や絵本づくりなどの民間人の表現活動そのものに、文化的主体形成の可能性を見出そうとした。¹⁰⁾ 北田は、現代の消費文化を、イデオロギー支配の機能を内在化した大衆文化と呼び、それに対抗すべき民衆文化の道をこれらの文化的創造活動に求めたのである。¹¹⁾ 彼は、人は他者と区別される私的領域をもつとともに共通の文化のなかで人として生きるという、個別性と類的存在性という二極のバランスのなかで生きる存在であるのに、大衆文化や管理社会化の進行によって「私的領域」の存在が脅かされつつあるという。その二つの極のバランスを作り出すものとして、文化的連帯から生まれる表現活動に注目したのであった。¹²⁾ このような彼の文化論は、70～80年代に顕著になった、経済・社会政策として国家的に「文化」が論ぜられるようになった風潮に対し、文化の本質を明確にしようという意図からでてきたものである。¹³⁾

話し合い学習などの社会教育実践に深く関与し、生活記録実践にも長く関わりを持ち続けている横山宏は、社会教育的視点から、自分史を通じての学習とは何かを追求する。横山は、最近の自分史ブームにもかかわらず、自分史学習が拡大しない現状を危惧しているように、自分史を書くことと、自分史学習とははっきり区別する¹⁴⁾つまり、単に自分史を書くだけでは、書くことによる自己変革は期待できないと主張する。彼によると、自分史学習とは、書くことを折り込んだ歴史の学習であり、歴史の中の自分を確認することによって、権利主体として

の自覚を促すことである。¹⁵⁾彼のこの主張は、生活記録や色川の歴史的視点の影響をうけつつも、日常意識の変容という社会教育の方法的視点から学習的要素を捉え返したという点に特色がある。しかし、反面、個々人の自由な発想、創造性、自己表現の欲求、また、プライバシーの問題など、現実のおとなの抱える様々な側面が、学習という枠組みから排除されたという感もぬぐえない。

以上、「庶民が書くこと」に注目した四人の論者の議論をみてきた。本論では、従来の議論に対し、書こうとしている者の立場に依拠して、書くことの現代的意味を考察していく。それが結果として、中高年期における成長という発達論的視点を抽出することに繋がると期待する。一般的に「書くこと」といっても、その意味するところは多様な表現活動を含むといえようが、ここでは、以上の四人の論者のように、一般の人が自発的に書こうとする自分史や手記などの表現活動に限定して考察する。

I 現代における中高年と書くこと

A 中高年の間で広がる多様な実践

1970年代後半から今日に至るまで、自分史活動が中高年の間で広がりつつある。その活動は、70年代は自主的なグループによる文集づくりという形式が多かったのに対し¹⁶⁾、最近では、商業的な企画を利用して出版するなどの個人レベルの活動も一般化している。成人教育施設の自分史講座なども中高年で盛況である。また、自治体や企業の文化的事業として、中高年の手記や自分史などを募集し、入選作で作品集を作るといったことも各地で開催され、多くの参加者を集めている。¹⁷⁾このように、多様な形式で、書くことが盛んに実践されているが、これは、どのような意味をもつのだろうか。特に中高年という時期と書くことはどのような関係があるのだろうか。

調査対象としては、例えば、社会教育施設での学習の後、自主グループが形成され、表現活動を主体的に続けているという実践例もよく耳にするが、ここでは、特に最近増えてきている個人的な表現活動、つまり、投稿という形で書くことに参加する中高年にスポットを当ててみたい。その手記を数量的、質的に分析していく。

使用したものは、読売新聞社が1993年に実施した、中高年（55歳～）対象の作文・手記コンテスト「盛年の主張」への投稿作品（総投稿数1477）である。この中で、50点が選ばれ、「盛年の主張」という題名で1993年にごま書房から本が出版されている。筆者はそれによって、この企画を知り、読売新聞社の理解を得て、1477の原文を1994年7～9月にかけて読売新聞本社にて閲覧・コピーし、自分なりの視点で整理・分析するに至った。これを

用いた理由は、まず、第一に、自由手記であること、数量がまとまっていること、年齢、性、地域、職業、学歴などの属性が明確に記されていることがあげられる。

B 中高年手記の数量的分析を通して

読売新聞主催の55歳以上対象の作文コンテストの投稿状況を年齢別・性別に整理し、各年齢における投稿率（投稿数をその年齢人口で割ったもの）を出した結果¹⁸⁾、男性は女性と比較して、どの年代も投稿率が高いが、特に①60～65歳と②70～75歳にピークがある。女性はいわゆる高齢期以前の55～65歳に投稿が偏っているという結果を得た。投稿率の高い年齢の手記内容を分析してみた結果、男性の場合、ピーク①60～65歳の手記では、退職や再退職といった職業的節目を迎えて、人生設計を語り、書きながら気持ちや考え方を整理しているという印象が強い¹⁹⁾。また、ピーク②70～75歳では退職後の生活や生き甲斐や健康法などを語っているもの、もしくは、社会への提言など、自己表現や自己表出的要素を感じる。²⁰⁾また、戦争体験記が多い²¹⁾のもこの年代の特徴である。このように、ピーク①と②は、その動機や質において、かなり異なっているといえる。

一方、女性では、圧倒的に55～60歳が多く、その年齢の手記を内容的に分析すると、子育ての終了、姑・夫の介護や死別、退職などのような社会的局面をむかえて心の様相を語り、来たるべき老後への心の準備をしているという印象が強い。女性のこのピークは、内容的には、男性のピーク①に対応すると考えられるが、男性よりも自己認識が客観的であり、自分なりの生き方を創ることへの柔軟性を感じさせる。²²⁾また、65歳以上では、投稿率が激減し、男性のように70代にピークがない。しかし、65歳以上でも投稿している女性のほとんどが元教員であるという事実から、その理由は年齢にあるのではなく、文化的慣習のせいであろうと推測される。

以上のように、男性の投稿率のピーク①（60～65歳前後）と女性のピーク（55～60歳）とは5年ほどのずれが認められるものの、その手記内容が、人生の局面を迎えて老後の生き方を摸索しているという点では一致していることから、書くことへの欲求と、生き方の摸索との相関関係が推定されうる。男性の場合は、70代にも大きなピークがあるが、この年代の内容は、摸索というよりも、それを超越した結果の人生への満足感が語られ、現状肯定的、自己表出的な表現が特徴的である。

ここでは、投稿率の高い年代に注目することによって、「なぜ書くのか」を考察してみたが、次に、55～65歳の中年後期と65以上の高齢期とに分けて、年齢による書くことの質的移り変わりを読み取ってみたい。

II 中晩年手記の内容的分析を通して

A 中晩後期（55～65歳）と書くこと

次は、中晩後期の男女の手記の中から数点を選び、年齢順に並べたものである。²³⁾ 選択基準は、まず、作者の気持ちがよく表現されているもの、文章的にある程度まとまりのある理解しやすいもの、特殊なものより、掲載できない手記との共通性の高いものを選んだ。また、自由手記であるため、文の内容に関して、アンケート調査のように数量的に割り切ることは無理がある。そのため、内容をできるだけ丁寧に読みとり、考察するという方法を取った。また、手記は部分的に用いることをなるべく避け、できるだけ全体の主張を大事にするよう心がけたが、過去の叙述の部分はスペースの関係上、やむなく省略した。原物は、400字づつ原稿用紙5～10枚程度である。

紹介した手記に引かれている下線は、筆者がつけたものであり、分析の根拠として特に注目している箇所を示している。なお、読売新聞社との約束により、紹介する手記には、実名はださない。

a 千葉県57歳主婦 ～夢は夫と共に旅行する～

・・・子供が独立して、私ひとり取り残されたような寂しい気分になりました。つまり、うまく子離れができず生きる張り合いを失ったのです。こうなって初めてこれまで、子育てや仕事にかまけ夫婦としての生活をおろそかにしていたことに気づきました。・・・これまで家庭を顧みなかった夫が退職してかわったのです。夫婦としての旅行に興味をもってくれるのです。一度は崩れるはずの運命でしたのに。不思議なきもちでいっぱいです。こうして時間をかけ、ゆっくりお互い見つめあったら、共通したものがいっぱいあることにやっと気づきました。遅かったのかもしれませんが、夫と共に少しでも長生きするのが私の今の夢です。

b 広島県59歳美容院経営主婦 ～ゆめは婆よし～

私の夢は美しく老いることだ。しかし、それがとても難しいことに私は気づいている。そもそも、美しく老いることは内からにじみでる美しさが問題なのだから。知性、教養、社会性、磨かなければならないことばかり。しかし、高校を卒業して40年余になる美容師生活の間、仕事、子育て、と必死でほかのことは考えるゆとりがなかった。その時どきで身に付けることはいつも後回し。気がついたら、残された時間のなんと少ないことか。この少ない時間をこそ有意義に大切に夢をもちながら生きたいと心底考えこんだ。世の中、歳をとっても大きな夢に挑戦して人生をまっとうする人は沢山いる。しかし、人には分相応というものがある。お金も地位も名誉もな

い私だから、地に足をつけた夢をもちたい。平凡に人に迷惑をかけずに生きたい。子供が私の死後、「お母さんは晩年が一番素敵だったね。」といってくれたらどんなにか嬉しいだろう。私は体に障害を持っている。だから学校ではずいぶんいじめられてきた。青春時代も楽しい思い出はなかった。でも今は違う。歳を重ねて、いやな思い出は全部消え去った。やっぱり「婆よし」の時代がきたのだ。足が悪くたって顔が悪くたって何のことはない。大切なのは今日という日を精一杯生きること。・・・ドレスにも宝石にも縁はなかったが、美容師になったおかげで素敵な出会いがたくさんあった。これからは、いっそう出会った縁を大切に、美容師のプロとして一生懸命生きていこう。そう、人生は楽しむもの。肩の力を抜いて気楽にいきよう。

c 山口県59歳の医療事務専門学校講師の女性

・・・現代は、歳をとってからの存在意識は自分で創っていかねばならない時代である。歳をとっているというだけで地域社会や家族から年配者が大切にされる時代は終わった。だから、自分で自分に、『あなた、生きてて良かったね』と、自分を励ましつつ余生をおくらなければならぬ。・・・そのような自分自身の存在意義を見つけるためにも、自分の声に耳をすませ、自己表現の場を確保しておくことが大切だ。

d 熊谷市60歳の元教員独身女性、現在実母の介護中

～人生経験から見出した生き甲斐～

現職中癌に侵され、闘病生活を送ったものの、復職でき教師の職を充分堪能しました。今はその職も去り、老母の介護をしています。時間的な余裕ができ、自分の過去を振り返った時、やはり、私は教育人間でした。すべて教育にささげ、その中に生き甲斐を見出していたのです。ですから、豊かな趣味もありません。こんな状態のまま、母の病気のために退職せざるをえませんでした。退職した次の日からは生活設計にとりかかりました。生き甲斐づくりとは、私にとっては、全力投球で生きてきた生活の足跡を見直すことによって泉のように湧いてくるものだと思います。私にとって、私自身の老後に備えるのも生き甲斐の一つです。・・・癌に侵された時にホスピスという言葉を知りました。しかし、内容を深く知る機会がなかなかありませんでした。暗中摸索しているうちにさまざまな情報を得ることができるようになりました。死の教育についても心ひかれます。在宅の学習には限度がありますが、今、ひとつひとつの情報に胸をおどらせています。私は、自分の終焉のために何をしておかなければならないのか、今の私なりに考えをまとめようと着手したところでした。

e 60歳の沼津市の元会社員男性～シルバーシート～

退職が近づくにつれ音退色語の人生設計に焦りと不安を感じるようになった。そんなとき、テレビでシルバーシートという番組をみた。あまりの衝撃にその晩はなかなか寝つかれなかった。これは、老人たちが社会から取り残されている現実を腹を立てるといった内容だった。・・・過日、同窓会に出席したが第一線を退いた仲間の話題は、もっぱら現役時代の役付、退職金や年金額のランクづけであったのには、ゆめもなく、生き甲斐もなかなかみつけれない我ら世代の悲しい本音であった。家庭にもどれば妻子に疎まれ、地域活動といっても、長い間疎遠にしてきたため、急には近づくことのできないジレンマ。しかし、それは、自らがまいた種なのだ。今こそ、自己変革すべく女性の生き方に学ぼうではないか。

f 広島県61歳の元臨床検査技師の男性、現在ボランティア ～今を生きる～

定年を迎えるにあたって、とくに積極的な人生設計を描くことはしなかった。しばし、ゆっくり休養したあとでと考えていたからだ。いよいよ定年となり、しばらくの間は雑用に追われ、さしたる変化は感じなかった。しかし、一か月もすると妙に落ち着かなくなってきた。・・・それなら、再就職の口もあったのだから、現役に残留すればよかったじゃないか、と自問自答すると、そこで、はたと「生きる意味」という大きな命題に突き当たるのである。私は早速行動してみることにした。現役のときには疎遠だった地域の人々と交流を図ることである。幸いなことに、その手段は生涯学習というネガってもない環境が公民館で提供されていることに気がついた。・・・こうして定年2年後の今、少しでも社会の役にたっているという充実感を味わっている。このようなことができるのも今しかない。私にとって今は掛け替えのない時である。私に与えられた大切な今を大事に生きたい。

g 64歳の千葉県の女性一人暮らし ～私の挑戦～

60の時、夫が癌で他界した。一人になった私は、自分の生活設計を自分でたて一人で生きていく決意をかためねばならなかった。・・・勤めを止めた私に残されたものは、意欲と健康と自由な時間だった。私は悲しみから立ち上がるために、まず、出来ないこと、辛いこと、投げ出したくなるものに挑戦してみようと決心し、英語を習い始めることにした。新しいことへの挑戦は苦しく、英語のある日は朝から胃が痛んだ。でも、休んだらそこで終わり自分と言ひ聞かせた。叱るのも私、誉めるのも私だった。・・・挑戦—私はこの言葉が好きだった。今でも好きだ。しかし、あの頃と今とは違う。若いころは、人と競いあわねば挑戦という感覚がなかった。つまり社会への挑戦だった。今は、自分なりの目標に向かっ

て努力を続けること。つまり、自分への挑戦なのだ。そして、それでいいのだと思えるようになった。・・・英語が話せるようになったら、外人に日本語を教えるという夢が出来た。今、私は昔と違う意味で挑戦を始めたのである。

50～60前半の手記を内容分析してみると、子育ての終了や退職、死別などの社会的役割の変化や身体的衰退、および、老後と呼ばれる時代を直前にしての不安や準備など、人生の局面と呼ばれるような状況に直面して、それまでの人生を振り返りつつ総括し、これからの人生(老後)を摸索しようとしている状況が読み取れる。

人生前半期は、必然的に社会的役割が与えられてきたのに、人生後半期は、人間関係にしろ、社会的役割にしろ、健康にしろ、自分が努力しなければ、それらが消滅していく時期である。だから、自分自身でそれを求め、自分なりのやり方で自分の生き方を意識的に創っていかなければならない。上の手記から読み取ることができるような、自分に与えられた状況を肯定していくことから、前向きに自分なりの生きかたや夢を見出そうとしている姿勢は、この年代の多くの手記に共通したものである。例えば、掲載したなかでは、手記aは「夢、生きる張り合い」bとeは「夢」cは「存在意義」eとdは「生き甲斐」fは「生きる意味」gは「挑戦」という言葉でこのことが表現されている。しかし、夢といっても、この年代の夢は若い時代の夢とは質的に異なることが、手記a b gなどでは自覚的に捉えられている。手記gでは、「若いころは社会への挑戦だったが、今は自分への挑戦である」、手記bでも、「地に足をつけた夢をもちたい・・・美容師として一生懸命生きていこう」と表現されているように、挑戦や夢といっても、若い頃のように、社会に認められたいという価値観から出たものでなく、自分自身に残された時間、空間、能力的限界のなかで、いかに自分の人生をより充実したものにしていくかという、自分なりの「意味」を創る夢なのである。次節で取り上げる65歳以上の手記では、夢や挑戦といった摸索・葛藤を表現する言葉は次第に消滅していく。

それでは、このような摸索に対して、書くことの意義は何であろうか。また、書く必然性はどこにあるのだろうか。この年代の手記に特徴的な印象は、前述したように、書くことが自分との対話を可能にし、思考の手段となっているということである。書くことによって自分の過去や現在を明確に認識し、そこから、老後の生き方を摸索するというプラン構築を言葉を使って明確にしていくのが書くことの一つの意味である。実際、「書くことで自分の生き方が見えてきた」「書いたら決心がついた」

と、書いている手記もある。これは、掲載した中では、手記 b d e によく表現されている。また、自分の過去や現在を書くことによって、現在の生を肯定し、生きる意欲を新たにするという情緒面での高揚も感じられる。これは、手記 c が指摘するように、「生きてて良かったね」と自分自身に言い聞かせることだともいえよう。

書くことの意義はそうであれ、それでは書くことの必然性はどこにあるのだろうか。それは、おそらく、現実には、生き甲斐や夢などあまりないからこそ、熱心に夢や生き甲斐をテーマに書くのであろう。書くことによって捜しだし、それを信じなければ健全に生きてはいけないのが人間なのではないだろうか。²⁴⁾ 実際、社会的に恵まれ、夢や希望にあふれている場合は、書く必要はないのかもしれない。1950年代、民主化の掛け声とはうらはらな封建的な日常的現実のなかで、若者たちが、真に民主的な社会を希求しつつ自分たちの生活を熱心に書きあった生活記録運動を振り返ったとき、現代社会にあって、中高年が、夢や生き甲斐について熱心に書くことで生き方を摸索している姿が重なって見えるのである。

B 高齢期(65歳以上)と書くこと

いわゆる高齢者と呼ばれる65歳以上の手記はどのような特徴をもつのだろうか。

h 大磯67歳独身女性 ～老後こそ自分流に生きる～

人生ここまで来てしまうと若くみられたいとは思わない。生き方は常に前向き。目まぐるしい世の中の流れに遅れまいと頑張っているつもりである。だから、昔を振り替えるのは好きではないが、書くためにあえて振りかえてみた。・・・今の年よりはしあわせだという言葉をよく聞く。・・・しかし、長生きはできても経済的裏づけのない年よりは多い。どうか、若い方々、表面だけ見て、幸せの一言で片づけしないでください。幸せとは、人が決めるものではなく、その人自身が感じるものだとおもいます。・・・ボランティアをしたいのだが、少し障害があるためままならない。幸い、歴史が好きで、独学をつづけていたのだが、それが、今、役にたっている。町史編纂のお手伝いやガイドボランティアをたのまれたのだ。友人との触れ合いも大切にしている。だから、私の心は豊かだと自信をもっていえるのである。しかし、人間いつボケがくるかわからない。人に迷惑をかけずに慎ましく生きていけたら最高である。

i 国分寺市77歳の女性 ～一味違う自分史を～

自分史の一作めは、還暦の記念に自費出版して、72歳の時に白梅という歌集を出しました。文章だけを綴った自分史より、このようなもののほうが面白いと自画自賛しています。私どもの一家は、静岡で空襲にあり、東京

に戻ってきてからも投書をつづけています。書くためには、よく読まなければならないので、新聞は2社のものをじっくりと目を通します。また、書くだけ読むだけでは駄目で、実践しなければと、各種モニターに参加したり、陳情などにも積極的に参加しています。・・・私は以前から、人間として生まれてきた以上、ほんの一点でもいいから、人間の文化という長い歴史の上に、私の生きた証を残したいと思っていました。それが、私の自分史「好文本」です。これが親戚に配ったところ意外に好評で「我が家の戦後史」とよろこんでくれました。第3のものも出したいと思っています。

j 広島県86歳の元警察官男性

幸運というか、この歳でも一心健康で、畑に野菜づくりに通っている。そして、午後は投稿やテレビをみたりしている。これは、偶然、地方紙に掲載されたのがきっかけで書くことを始めた。掲載されると、さまざまな人からお手紙をいただいて恐縮している。時代おくれの自分の書くものが紙上にのるなんて。書くとなると、テレビをみるのも新聞を読むのもそれだけの注意が必要となり、気をつけるようになる。これが案外惚け防止にいいのではないかと思われる。他人から見れば、ばかばかしいと思われるかもしれないが、それで結構。自分の人生は他人のためのものでなく自分のためのものだから。勤めをやめてから、野菜づくりと日記は止めたことがない。

k 茨城県88歳の女性、一人暮らし ～日々感謝の心で

夫がなくなって空虚な日々が続く、明るく打ち込めるものを求めていた矢先、郵便局で絵手紙教室をみつけました。描く楽しみと和やかな友達のおつきあいに幸せをみつけました。・・・一人暮らしはまったくお話をしない日があり、声が小さくなりましたので、詩吟を習い、一人の時は楽しく吟じています。・・・毎夜、翌日の予定を記し、今日一日の感謝と明日の幸せを思い、仏壇に合掌し、亡き夫に挨拶をして休みます。・・・この町の人々とおつきあいは私にとっては一番嬉しいことであり、この地がはなれられません。・・・あとどれだけ生きられるかわかりませんが、最後の日まで明るい心で感謝して生きたいと思います。

h は67歳の女性の手記であるが、摸索や葛藤はあまり感じられず、自己肯定的な表現(下線の箇所を参照)が特徴的である。i j k と年が増すにつれ、生活への満足感や充実感が主に表現されるようになり、精神的な安定の高まりが推定される。k は88歳という長寿者の手記だが、「日々感謝」という題のように、生きていることへの感謝に支えられ、心穏やかな表現が印象に残る。掲載出来なかった手記でも同様に、長寿の手記ほど「感謝」

の言葉が盛んに使われるという傾向がみられる。また、サミュエル・ウルマンの詩「青春の詩」の「青春とは心の様相をいう」という一節は、65～75歳ぐらいの年代で非常に好まれ、よく引用されている。このように、高齢期の手記は使われる言葉が似かよっているという傾向を持ち、それらが生活の信条になっていると推測される。現代の高齢者の生活がかなり多様であることは多くの手記から判断されるが、固い信念を持ち、それが揺らいだり変化する可能性には乏しいことは、ほとんどの手記からも共通して感じられることである。

以上のように、高齢者の手記では、摸索や書きながら考えるといった中年後期の手記にみられた思考的傾向は消滅し、非常に自己肯定的に日常生活を表現し、かつ、書くことによって確信を深めるのと同時に、自分の生き方を社会にむかって表現したいという自己表現や自己表出の欲求が感じられる。つまり、思考の道具としてより、会話の道具として書くことが機能しているのである。

また、手記 i に書かれているように、自分の生きた証を何かこの世に残したい、小さくても文化的寄与をしたいという気持ちも書くことの動機としてあげている者も少なくない。70歳以上の男性の手記では、戦争体験や、社会や政治に対する提言などをテーマにしているものが多く、戦争体験は、70歳以上の男性の約半数が何らかの形で触れており、戦争は決して彼らにとって過去の遺物ではなく、現在の生を今だに大きく規定しているものであることがわかる。戦争体験を語ることは、次世代への継承という社会的使命が逆に彼らに生存の意義を与えているという意味で、彼ら自身の生き甲斐にもなっているといえよう。²⁵⁾これは、書くことによって社会に対して文化的寄与をしたいという手記 i に通じるものである。

65歳以下の手記は、過去を振り返り、現在を述べ、そこから、来たるべき老後を摸索しているという点では共通していた。それに対して、70を超えるようになると、死という未来から、現在の生き方を規定していこうという逆方向の展望が綴られるようになる。つまり、死を真近にするほど、「いかに死ぬか」ではなく、「今日をいかに生きるか」ということが真摯に語られる。²⁶⁾80以上の高齢者が、心静かに精一杯生きることができるのは、未来を今に限定することからでてくる心のゆとりのせいであろうか。高齢者の孤独感、単なる人間関係的孤立からくるものというより、未来展望（時間的展望）の平塞感や自己の在り方の意識が原因しているらしい²⁷⁾という研究報告があるが、書くことによって、自分なりの時の流れの感覚や未来展望を形成し、その中に穏やかに身をおくことができるという印象は、多くの手記から感じられることである。

手記 j k のように、日記や新聞への投稿などによって、日常生活の中に書くことを位置づけることは、高齢者の健全な生活を保つために有効である。特に j のように、新聞・雑誌への投稿を生き甲斐にあげているものが多いが、これは、新しい情報への積極的姿勢、よく読み、よく聞き、よく考え、まとめるといった学習習慣を日常生活の中に位置づけるだけでなく、在宅しながらできる社会参加の方法として多くの可能性をもつ。投稿したものが掲載されたり、入選したりという社会的評価は、自分の存在意義を確認する喜びにもつながるのである。

65歳以上の手記の特徴は、それまでのように摸索・葛藤という思考的要素が消滅し、書くことで、より自己の一貫性を高めるといった効果が見られる。したがって、書くことによる「認識の変化」という意味での学習効果はさほど期待できないが、自己表現や自己表出という会話的充足感からくる精神的開放、アイデンティティーや存在意義の確信からくる精神的安定感や生きる意欲の高まりなど、「情緒面での効果」が特に注目されよう。高齢の人々に注目することは、人間の健全な成長にとっての情緒的側面の大切さを指摘し、認識の変容という認知的な側面のみで学習や発達を捉えることに疑問を投げかけるものである。

III 中高年における書くことの意義と限界

IIにおいて、中年後期と65歳以上の高齢者の手記を比較検討してきたが、ここでは、その結果を用いて、書くことの意義とその限界について考察していく。

A 書くことの意義

① 生き方の摸索として

書くということは、過去、現在、未来に通じる自分なりの意味を探索する場である。自分なりの意味の摸索は、老いを迎える前の55～65歳の手記に顕著にみられる。この時期は、老いを迎えるにあたって、それまでとは価値観を変える必要にせまられている時期である。つまり、人生後半期の生き甲斐や幸せとは、限定されたものを自分なりにいかに深く味わうかという、意味や質を求めようとする態度から創りだされることに気づくことから生まれる。そして、書くことは自分なりの意味を認識するための場であるといえよう。老いの入り口で盛んであった摸索的思考は、65歳を超えたいわゆる高齢者の手記にはほとんどみられない。

② 生の意義の再認識と生きる意欲の高揚

中高年の手記は、盛年の主張への投稿手記に限らず、過去の苦労話や、戦争体験で始まる手記が多い。²⁸⁾高齢者という過去への思い出に埋没して暮らしているという

見方もされよう。しかし、過去を再認識することは、決して非生産的の行為ではないようだ。それは、現在の自分の生の意義を再評価（反省も含めて）することを促し、生きる意欲を高揚させる。中年後期では、そこから、老いという未来への人生設計が始まる。つまり、現在や未来に立ち向かう意欲を与えてくれるのが、過去を書くということだといえよう。

③ 自己表現の欲求と対話の形成

自分探しや自己の摸索は、自分との対話といえようが、書くことはまた、面と向かって人にいえないことを表現するのを可能にする。生活記録運動とは違った意味で、直接の会話がしにくくなっている現代社会にあって、日常生活のなかで、会話するきっかけのつかめない高齢者は多い。書くことは、そのような人の精神を解放し、社会との対話を形成させる。このような意味から、現代的対話の可能性を拓ものとして、書くことや、書いたものを紹介することがもっと注目されているのではないだろうか。高齢者が心を開いて、自分を表現したいと思う気持ち育てるような場の形成が必要であろう。

④ 社会に対する文化的寄与として

自分史が、自分の生きた証を社会に残すだけでなく、文化的にも大きな価値をもつという解釈は、自分史運動の大きな原動力であった。²⁹⁾ここでも、戦争体験の継承を自分の社会的使命とし、情熱をもって手記に書いている者が70歳以上の男性に多い。女性も書くことによって、何かしら文化的に寄与したいという願いを持っている。書くことは書き手にとって大きな意味をもつと同時に、その読者にとっても、年配者の生き方を学ぶことの意義は大きい。しかし、実際は、手記や自分史の多くは、高齢者の深い思い入れにも関わらず、活字にもならず、人の目にも触れないのが現実である。書かれたものが真に文化として機能するような工夫が必要であろう。

B 書くことの限界性

書くことの世界を広げていくことは、中高年の創造性を伸ばすと主張した。しかし、全く新しい事に直面したり、新しい事を考えるとき、人は、言葉を用いては思考していないということが言われる。言葉は文化を反映し、その文化の枠の中でのみ有効である。だから、逆に言葉は文化的支配の道具だという言い方もある。書くことは、行動に入る前に予め、自分の言葉の世界の中でやり方を組み立ててみるということを明確にし、それによって日常生活をコントロールし、その人らしい適切な行動をとることを可能にする。しかし、このことは反面、日常生活の行動や感じ方を常識的にし、自分自身の枠を超えることが不可能なものに矮小化してしまう可能性ももち

るのだということも忘れてはならない。

自己の一貫性を保つということは、高齢者自身にとっては、健全な精神状態を保つという効果をもたらすといえようが、悪くすると、頑固さや、柔軟性の欠如という面の助長にもつながるのである。摸索や葛藤という思考的要素の少ない高齢者の手記が、文章自体の面白味という点では今ひとつであるのもそのようなところからきているのだろう。

書くことによって、自己の生活に埋没するのではなく、書くことによって、自分を知ると同時に、生活する意欲や新しいものを吸収していくエネルギーが培われ、書くことが新しい関係をつなぐ媒介として機能するように心がけることが大切である。そのような意味からすると、社会に開かれた状況の中で書くということの現代的な環境づくりが、高齢の人々にとっては特に必要だといえよう。新聞の投書欄や自分史や手記の公募が中高年の間で上手に利用されている。分析に使った手記のなかでも、それらへの応募が生き甲斐になっていると書いている者も多い。これらの魅力は、自分の書いたものが活字になり、多くの人に読んで貰えるということにある。このようなことを考慮に入れ、現代の中高年が参加しやすいような方法の開発が必要ではないだろうか。

C 話すことと書くこと

これまで、書くことの意義を主張してきたが、なぜ話すことではなく書くことなのだろうか。両者は言葉を用いるという意味では同じであり、言葉の可能性も限界も共有しているといえる。その違いは何だろうか。本論の考察に限定して言えることは、書くことは自分との対話を可能にし、思考の道具として機能しやすいということである。中高年の手記から感じられることは、けっして喋るようには書いていないということである。書きながら考え、また書き直すを繰り返してできた作品なのである。中には、一つの手記（原稿用紙5枚程度）を書くのに三か月もかかったという人、「考え直したから、前のもとの差し替えて欲しい」と二部投稿した人なども希ではない。だから、考え抜いた末の結晶化したような表現にたびたび出会う。書くことは、読みながら再考することを可能にするので、考えを客観的に組み立て易くするだけでなく、自分の直接の感情や日常性から一步離れて見渡すというゆとりの空間をも構築する。また、直接、面と向かって言うよりも表現しやすい（逆もあるが）ことや、相手を限定する必要がないことから、会話の可能性を広げる意味ももつといえよう。

書くことはこのように、会話の可能性や創作としての可能性、また思考の手段として、話すことにない可能性

を拓ものであるが、反面、話すことのよさが失われるという場面も多い。例えば、いきいきとした表現を書くことは難しいように、思考が表現の邪魔をする場合もある。このことは、特に高学歴の中老年男性の手記にみられがちな現象であり、文をまとめようとするあまりに、自分を素直に表現することができない。このような自己表現の固さは、長年にわたる職業体験のつけなのであろうか。にもかかわらず、その投稿率の高さ³⁰⁾から推定されるように、書くことで表現したいという欲求は女性以上に強いものがある。このようなジレンマが伝わってくる時、ただ書くだけでなく、話すことによる精神的な開放も、特に中老年男性には必要ではないかと思われる。このことから、話し合いと書くことを組み合わせた1950年代の共同学習の方法が、今一度、問い返される必要があるだろう。書くことと話すことという、発達上の表現活動の比較の問題は筆者の今後の大きな課題である。

おわりに

「中老年の書くこと」の意味を、中老年自身の意識に依拠することによって分析した結果、書くことは思考という認知的側面での発達を促すだけでなく、生きる意欲や精神的安定という精神的・情緒的側面における中老年の成長を支える多くの要素を内在化させていることがわかった。このように、一生涯における発達という長期的展望で人間の成長を捉えることは、従来の学習論が見逃しがちであった成人の発達における情緒的側面の重要性を指摘するものである。したがって、一つの視覚に捕われず、多面的に人間の成長を捉える目が友人の発達や学習を考える上で必要であり、学習というものをもっと幅広く捉えることの重要性を痛感した。

ここでは、投稿という形での書く活動に注目して考察したが、書くことそのものは、自分との対話であり、そのような意味で社会化されることがなければ、自己満足で終わってしまうという限界をもつ。やはり、話し合い、書きあい、読みあうという場の形成が中老年のライフスタイルに合わせて工夫される必要があるだろう。

分析方法としては、多くの課題を抱えている。従来の客観的な調査への疑問から、アンケート調査の数量的分析ではなく、自由手記を質的に分析してみたいという思いと同時に、いわゆる学習・福祉施設に集まる者ではない人を対象にしたいという希望をもっていた。そこで、投稿という形の手記に注目したのであるが、現在のところ、はっきりとした分析軸をもたない。今後のやり方として、特定の言葉に注目するという方法を思案中であるが、自由手記の分析の方法自体を研究することの必要性を痛感している。また、どのような手記を選択するかと

いうサンプルの代表性という問題も残しているので重ねて検討していきたい。

最後に、現在は広告局で多忙な日々を送られているのにもかかわらず、「盛年の主張」の企画当時の責任者として、快く、二カ月にわたり膨大な量の投稿手記を閲覧させて下さった、読売新聞社広告局の木内敏之氏に厚くお礼を申しあげたい。

〈注・引用文献〉

- 1) 高橋恵子・波多野誼余夫『生涯発達の心理学』岩波新書, 1990. p.1-2
- 2) 分析した手記の中で、このような風潮に抵抗を感じると書いているものが、50代後期の男女に多い。
- 3) 鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社, 1963 p.20-21
- 4) Ibid. p.33-4
- 5) Ibid., p.22-3 p.36 p.48
- 6) 例えば、四日市の紡績工場や三重県の東垂紡織の女工など、しかし、『エンピツを握る主婦』にみられるように主婦も多かった。(参照: 鶴見, 『生活記録運動の中で』 未来社 1963)
- 7) 色川大吉『新編明治精神史』 中央公論社 1973 はしがき
- 8) 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』中央公論 1975 p.12
- 9) 横山宏『成人の学習としての自分史』国土社 1987 p.22-3
- 10) 北田耕也『大衆文化を超えて』国土社 1986 p.38
- 11) Ibid. p.22
- 12) Ibid. p.103
- 13) 北田耕也『地域文化の創造』p.16, p.191-3
- 14) 横山宏『成人の学習としての自分史』国土社1987 p.10-1
- 15) Ibid. p.57
- 16) Ibid. p.14-6
- 17) 例えば、「信州年より通信」は、松本の公民館を母体に県内の高齢者を中心に通信という形で年に二回出されている文集であり、すべて郵送で行なわれる。また、東京都社会福祉協議会では、毎年、60歳以上を対象に「ふるさと東京」という手記を募集し、入選作で作品集を作っている。
- 18) 投稿率は年齢毎の投稿数をその年齢人口で割って算出した。投稿数ではなく、投稿率にしたのは、高齢になるにつれ、生存者の絶対数が減少し投稿数では単純に比較ができないためである。
- 19) 手記 e, f を参照

- 20) 手記 h～k を参照
- 21) 70歳以上の男性の約6割が何らかの形で戦争に関してふれている。女性もこの年代は戦争を体験しているはずだが、戦争のことにふれるものがほとんどいないのは不思議であり、今後、追求してみたい。
- 22) 手記 a～d 参照
- 23) 全部数を年齢、男女別に分け、その中から選択したものを年齢順に並べた。まず、手記全体から主張を読み取るように心がけ、できるだけ部分的に使うことは避けるようにした。まず、a～gまでを通して読んで欲しい。
- 24) 時実利彦『人間であること』岩波新書1970 p.117
- 25) 70歳以上の男性で、戦争体験記執筆が生き甲斐だと書いているものが目立つ。
- 26) 手記 i j k を参照
- 27) 工藤力・長田久雄・下村陽一 “高齢者の孤独観に関する因子分析的研究” 『老年社会科学』6(2) 1984 p.167-85
- 28) 掲載した手記に関しては、スペースの関係上、過去の叙述の部分はやむをえず省略した。原文は原稿用紙5～6枚のものが多いが、なかには10枚に及ぶものもある。
- 29) 本論文の「はじめに」の色川大吉の議論を参照
- 30) 特に60歳を越えると、女性の投稿は低迷するのに対して、逆に、男性は急激に増加する。